

20005

CTOに対する順行性IVUSガイドアプローチにおいてViewITが有用であった一例

¹桜橋渡辺病院 心臓血管センター、²桜橋渡辺病院 心臓血管センター

川村 克年¹、岡村 篤徳²、岡田 裕介¹、水谷 覚¹、高山 雄紀¹、丸山 篤史¹、下平 直紀¹、谷尾 貴寛¹、佐藤 洋一¹、伊達 基郎²、永井 宏幸²、小澤 牧人²、中谷 晋平²、小山 靖史²、藤井 謙司²

【背景・目的】 慢性完全閉塞性病変(CTO)の順行性アプローチにおいて、偽腔にIVUSを挿入し、2ndガイドワイヤを真腔に誘導するIVUSガイドPCIは、カテーテル先端からWindowまでの距離が最も短いVolcano社製のEagle Eyeが、一般的に有用である。今回、Terumo社製IVUSであるViewITがEagle Eyeに比し、このIVUSガイドPCIにおいて有用であった症例を経験したので報告する。**【症例】** 症例は、左回旋枝のCTOで、血管径は3mm弱であった。1stガイドワイヤは病変部を通過したが、血管造影上、偽腔であった。Eagle Eye Platinumを用いて血管内を観察したが、20MHzの画像であること及びカテーテルサイズが大きく、真腔の観察が困難であり、ViewITに変更したところ、真腔を明確に検出でき、2ndガイドワイヤを真腔に誘導することができた。**【考察】** 本症例は、血管径が小さく、偏移した小さな真腔の検出には、カテーテルサイズが小さく40MHzの画像を得ることができるViewITが有用であった。また、ガイドワイヤ通過後のインターベンションにおけるIVUS上の形態的所見の検出が容易であった。このことから、CTOに対するIVUSガイドPCIでは、血管性状に応じて、IVUSカテーテルを選択することで、より確実な治療を行えると考えられた。